

2012年  
12月18日  
火曜日

●退任教授最終チャペル講話／竹本 洋 教授（経済学史）

# 私たちに地平線は見えるか

私たちは例外なく「時代の子」である。人は親を選んで生まれてくる。ことはできないから、いつの時代のどんな社会に生をうけるかは運命としかいいようがない。とはいえどの時代の人とも与えられた自分の命をいづくし、真つ当に生きぬきたいと願っているにちがいない。いまでもその願いに変わりはないであろう。しかし真つ当に誠実に生きることが今日ほど難しい時代はないのかもしれない。世界大に広がった競争の圧力のもとで精一杯手を抜かず生きようとするばかり、人はいつのまにか目にもみえない巨大な機械の歯車の一つとなり、ただ闇雲に回り続けるだけということになりかねない。ユダヤ人をガス室に送り込んだアイヒマンは、その責任を問われた裁判で、「私は揺るぎない義務感に従って、自分に課された仕事をかたづけただけで、と反論した。それの自意識では、ガス室送りをするにあたえられた任務と思ひ定め、それを忠実に滞りなく遂行したにすぎない。かりにその責任が問われるとしたら、かれにその「仕事」を命じた者が、あるいはナチズムという怪物のような強大なメカニズムにあると抗

弁したかったのである。してみると、かれにとつては義務と信じるその仕事の意味は彼の頭のなかに思い浮かぶことはなかったし、またそれを考えたくもなかったのかもしれない。現在でも私たちはそれぞれの場で自分の仕事に精励し、その任務をはたそうとしている。原子力発電の開発に携わった研究者や技術者たちも、効率性の高いしかも「安定した」新たなエネルギー源を供給したいという社会的な使命感をもっていたはずである。またiPS細胞の研究開発にたずさわった人々も、一刻も早く成果をあげ難病の治療に役立ちたいと述べている。その熱意と誠実さを疑う者はいない。経済学者もそうした技術開発競争や企業間の競争の経済的有益性を説き続けている。しかし残念なことに当の研究者や技術者には、そうした技術やその開発を促進する競争という制度の目前の有用性を主張しえても、その技術開発や競争の行き着く先を、とりわけ画期的といわれる社会的影響力の大きい成果ほど、その思わぬ破局的結果を予見しえない。いいかえれば最先端の科学技術の開発者だけでなく、社会の

片隅でルーティンの仕事にたずさわっている者も、競争にせかされながら、その仕事に誠心誠意うちこみ当面の成果をあげようとするのでかえって、未来への無責任という逆説的帰結を背負い込むことになりかねないのである。科学研究や技術開発と一見無関係なところにいるとおもわれる私たちもそれに賞賛の拍手をおくり、さらにはその結晶である商品やサービスの愛用することで、間接的にこの時代に加担しているといえる。これが自由競争と科学技術万能（各種の「力」への信奉）時代のつらい背理のようにおもわれる。ブータンの首相ジグミ・ティンレイは、「私たちは地平線を見つめる人のように、どこに行きたいのかは知っています。私たちは小さい国ではあるけれども、そこに向けて道を造っています。急ぎ過ぎず、むちやをせず、人間性をたもって」と語っています（『朝日新聞』2012年8月1日インタビュー）。一国の指導者の背筋を伸ばした美しい言葉である。ひるがえって私たちはといえ、地平線を望める風景をとうに失ってしまったし、精神の地平線あるいは未来へのはるかな眼差しも見失っ

ている。私にも地平線はみえないが、地平線をささぎっているものを想像力で乗り越え、そこから私たちの生（この時代にも）に生まれてきたことの意味と根拠を眺めることができたなら、と夢想している。このころは、見たいものだけを見、聞きたいことだけを聞き、つき合いたい人だけとつき合う、という気風が強くなり、異なる意見や嫌いなものなどには目も耳も心も閉ざし、一方的に自分の意見や好みをしやべり続け、それをおしつけるという場面にでくわすことがある。あまつさえ自分より弱いと見込んだ者を「異物」のようにみなして、攻撃し排斥することが日常化している。こうした状況のもとでは、あえて聞き、読み、そして見るという強靱な意志を取りもどすことで、地平線を垣間見ることができるとは思えない。かのカントも「あえて賢くなれ」と説いていた（啓蒙とは何か）。賢明たらんとすれば、常識と化したものの見方や社会の目にもみえない掟やあらあらしい時流にときには背を向けることになるかもしれない。しかしそれが未来の人たちに背を向けることになるかどうかは誰にもわからないことではないだろうか。